

「第2回畜産における温室効果ガスの制御と利用に関する国際会議」 (GGAA2005)での実行委員としての会議運営ならびに参加発表

岸 本 正

畜産科学科食料生産科学講座助教授

1. 目 的

今回も高橋教授を実行委員長としてスイス連邦工科大学で第2回会議を開催することになり、申請者は国際実行委員会委員として開催運営にあたり、座長ならびに研究発表を行なう。

2. 期 間

2005年9月18日～2005年9月27日

3. 場 所

スイス・チューリッヒ

4. 内 容

この国際会議は本学教授・高橋潤一を実行委員長として2001年に第1回会議を帯広で開催した。第2回の会議は、スイスのチューリッヒ市（写真1）にあるスイス連邦工科大学（ETZ Zurich）で開催されることになった。実行委員長は高橋潤一教授，副実行委員長はスイス連邦工科大学のマイケル・クロイツェル教授である。開催期間は2005年9月18日から24日である。

本国際会議は、畜産に関わる温室効果ガスの中で、とくにメタンを重要と位置付け、その制御技術とバイオマスエネルギーとしての利用技術について世界各地の研究者・技術者が討議し、その成果を地球環境保全に資すると共に循環型社会の形成に寄与することを目的として開催された。

会議のセッションは次のとおりである。

セッション1 温室効果ガスと畜産業

セッション2 メタン制御と利用

2a ルーメン内メタン生成の制御，ルーメンエコシステムのバイオエンジニアリング



写真1. チューリッヒ市（手前が旧市街）

2b バイオガスプラントならびにバイオリサイクリング・ふん尿処理関連技術

セッション3 家畜生産から発生する窒素損失の低減

3a 家畜における有効利用

3b ふん尿管理貯留技術、バイオリサイクリング、畜産廃棄物等の土壌還元の関連技術

セッション4 温室効果ガスの気圏・土壌圏における循環のモデリング

会議の当初の目的から、パラレルセッションとせず開催期間を通して1会場で開催されるのが特徴である。参加者も、家畜、環境、作物、廃棄物利用、エネルギーなど広い分野の研究者が参加した。参加者はおよそ30カ国から160名にのぼり、本学からも教員、学生合わせて16名が参加した。

発表数は、口頭発表は招待講演を含めて59課題、ポスター発表は79課題であった。招待講演、口頭発表はスイス連邦工科大学メインビルディングのオーデトリウム（写真2）、ポスター発表は道路をはさんだLFWビルディングで開催された。

筆者は今回ポスターでの研究成果発表となった（写真3）。タイトルは「Application of Anaerobically Fermented Dairy Cattle Slurry for Crop Production as Liquid Manure with Fertility Adjustment」で、バイオガスプラントから排出される消化液を利用した作物生産に関する研究で、消化液中の肥料成分を利用し化学肥料を減らすと共に循環型作物生産を目指した内容である。ポスターは開催初日から掲載可能であったので、初日から早速提示した。9月23日（金）の15:15-16:15までがポスター前での説明時間に割り振られており、質問者に対応した。

本会議では国際実行委員会メンバーには座長が割り振られており、筆者も梅津一孝助教授と共に9月21日（水）の「セッション2b バイオガスプラントならびにバイオリサイクリング・ふん尿処理関連技術」の担当となった。休憩をはさんでの前後11題の担当であったが、やはり英語が母国語でない者にとっては、最後の頃になると単語の語彙の少なさと表現力の乏しさをひしひしとを感じるものであった。

9月22日（木）は見学会で、バスで1時間半位に位置する大学の農場の見学（写真4）と観光地として有名なルツェルン市を訪れた。会議の中ほどでのちょっとした息抜きであった。

最後に、今回の会議参加に援助をいただいた帯広畜産大学後援会に深謝する。



写真2. スイス連邦工科大学（会議が開催されたメインビルディング）

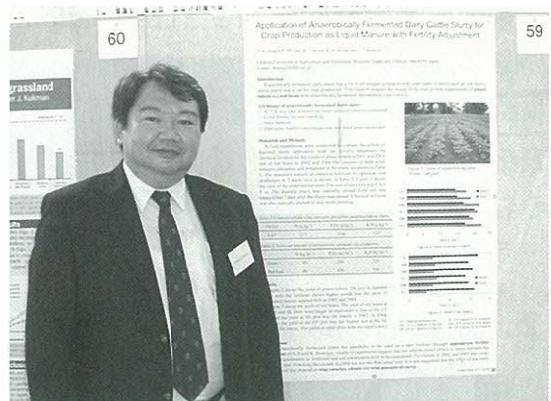


写真3. ポスターでの研究成果発表



写真4. 農場でのデモンストレーション